余命宣告されたけど死にそうにない

ばぶ美

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一年後、私は死ぬ。

そう、たとえ一ヶ月後であっても、一年後であっても、私は一年後に死ぬことになっているのだ。

※必須タグのほとんどは保険

※息抜きのゆっくり更新作品

※連載→短編に変更いたしました！

目次

一話 …… 1
二話 …… 26
三話 …… 47

一話

医者に、一年後にあなたは死ぬと言われた。

もちろん、こうもストレートに言われたわけではない。遠回りに、ゆっくり、残酷に伝えられた。

実感、というものはよくわからなかった。

幼い頃から患っていた病気だし、いつか死ぬことも理解していた。突然血を吐いたり、突然息が苦しくなったりすることがよくあったのだから。まあ、長くは生きられないな、と。

分かってはいたが、それが辛くない、悲しくないという訳では無い。

余命宣告をされた時は、その衝撃で発作を起こしたし、父と母に伝えた時は三人で子供のように泣いた。

体調を崩して遠足に行けなかった時だって、その都度泣いた。

夏はみんながプールに入るのを眺めながら、いつも手を握りしめていた。

発作を起こす度に、苦しくて仕方なかった。
血を吐く度に、自分を憎んだ。

でも、死にたいとは思わなかった。

私は、生きていたい。
明日だって、来週だって、来月だって

一年後だって――――

私は、生きていたかった。

葵田真昼の一番の楽しみといえば、同じ病室に入院してくる人と仲良くなることだった。例えばそれは、歳の近い少女であったり、自分の母より歳上の女性であったり…し

かし、この病室はＷｉＦｉが入っている分値が少し高く、多いのは圧倒的に前者だった。それは真昼の狙い通りで、中々学校に行けない真昼にとって、友達を作る一番のチャンスなのである。

ある時、一人の少女が入院してきた。

真昼と同じ高校二年生で、顔も体つきも整った綺麗な人。名前は、毛利蘭というらしい。かの有名な『眠りの小五郎』の娘という。

年も同じで、蘭の明るく優しい性格から、二人はすぐに仲良くなった。

蘭は、怪我で入院しているらしい。本来なら入院するほどのものではないらしいが、怪我した場所が特殊で大事をとって…と本人が言っていた。だから、入院期間もそこまで長くない。一週間だけだという。

それはとても良い事なのだが、真昼は少し残念だった。いつだってそうだ。どんなに仲良くなったとしても、再会することはない。一度だって、ない。

真昼は出会った人――――真昼にとっての友達を、皆覚えている。盲腸で入院した晴海さんに、貧血でちょっとだけいた遊さん、弟さんがイケメンな茜さん、モデルをしていたのどかさん、他にも、沢山。

誰一人、私に会いに来てはくれない。

きっと、蘭さんもそうなる。

真昼は、そう確信していた。

それに、蘭には友達がとても多い。この一日の間だけでも何人もの人が蘭に会いに来ている。そんな充実した生活をしている子にとって、真昼はただの隣人でしかないのだから。楽しいけど、寂しい一週間になりそうだな、と真昼は思った。

そう、思っていたのだが。

「真昼ちゃん、今日はこの本を持ってきてみたんだけど…どうかな？」
「ありがとう、蘭さん。まだ読んだことのない本だから、嬉しい」
一ヶ月ほど前に退院した蘭と真昼の交流は、未だに続いている。途切れる様子はなく、むしろ頻度と連れが多くなっている程だ。
今日は蘭の親友という鈴木園子――かの有名な鈴木財閥のご令嬢らしい――が一緒

に来ていた。彼女も、蘭にいやいや付き合っているという素振りは全く見せないノリのいい人だ。それに、蘭と同じで明るく素直な人。

一ヶ月前までは別れを悲観していた真昼だったが、今では蘭達が来るのが新しい楽しみだったりする。

「それにしても…今日も相変わらず顔色悪いわねー。真っ白よ、真っ白。真昼じゃなくて真白って感じ」

「ちょっと園子!」

園子が真昼の頬をつつきながら言う。園子はグイグイ来るタイプなので、真昼は押されながらもここまで仲良くなった。

「あまり外に出ないからかな。ふふ、いいでしょう?」

「確かに羨ましいけどあんたは白すぎ!もっとご飯を食べなさいっ。ほら、私からはこれ持ってきたから」

そう言って園子は白い箱を差し出した。パッケージからして、ケーキだろう。

「これは…」

「あんたはこういうの遠慮するはずって蘭が言うから、人数分買ってきたの。ね、蘭」

「えぇ。真昼ちゃん、一緒に食べましょう?」

蘭が手際よく紙皿とスプーンにケーキを盛り付ける。フルーツの輝くショートケーキだ。
「…ずるいです、こんなに美味しそうなもの、断れるわけないよ…」
「何よー、この前は私の持ってきたチョコレート拒絶したくせに」
「だってあれ一粒ウン千円するって！」
「ほらほら、喧嘩しないで。ケーキ準備できたよ」

（…あぁ、本当に楽しい。ずっと、こんな時間が続けばいいのに）
真昼の中に、ぽつりと、悲しい願いが生まれた。

季節はすっかり冬になり、朝起きるのが億劫な日々が続いていた。年を越えてもまだ、真昼と蘭達の交流は途切れそうにない。きっと、真昼が死ぬまで、この関係は終わらないのだろう。そういう確実なものになったのだ。

今日は、蘭とともにコナンという少年が来ていた。園子の次に真昼が会うことの多い

人物である。蘭の元に居候している少年らしく、高校生である真昼と本の趣味が合う賢い小学一年生だ。あまりの賢さに真昼は、彼は何かあって縮んだ大人なのではないかと疑っていたりする。もちろん、そんな訳ないと分かってはいるのだが。

「最近風邪がはやってるけど、二人は大丈夫？」

「ええ。元気いっぱい！真昼ちゃんにも分けてあげようか？」

手を握り合いながらきゃっきゃと笑う年上二人を、コナンは冷めた目で見ながら笑っていた。

（やっぱ女子のノリはわかんねーな）

「でも、病院は菌でいっぱいだから、気をつけてね」

「うん、ちゃんと消毒とかもするわ。あぁ、でも…コナン君は少し、ひかえた方がいいかな。まだ小さいし」

小さいという言葉に反感を覚えながらも、コナンはその意見に同意した。一年の間ではまだだが、高学年の間でインフルエンザが流行っているらしいのだ。病人に――――真昼にそれを移すわけにはいかない。

「そう、だね…コナン君、当分の間は…お別れ、かな」

寂しそうな表情で、真昼がコナンの目を見つめる。まるで、今生の別れと言わんばかりの表情だ。大袈裟なリアクションに違和感を覚えながら、コナンも極力寂しそうに返

事をした。
「それならコナン君がまたここに来るのは、二年生になってからかな？あ、でも春休みには、きっとまた来れるわ」
「そっか…楽しみにしてるね」
（その時までは生きていたい、けど）
真昼が余命宣告をされたのは、高校二年生になる直前のことだった。つまり、春休みの間。余命の一年が、そろそろ終わろうとしていた。
（言わないといけない、私、死ぬかもしれないって）
でも、だってが心の中で反復する。そんな勇気を、死にゆく真昼は持ち合わせていなかった。
人間は、死を嫌う。
別れを嫌う。
長い間病院にいる真昼は、その事を理解していた。
ある人は、重い病気を患い恋人に捨てられた。
ある人は、死ぬことが分かり徐々に孤独になっていった。
（私も、そうなるかもしれない）
（でも、言わなくちゃ…）

結局その日、真昼の口から真実が伝えられることはなかった。真昼はもう、少しでも長く生きられるように神に願うしかないのだ。
自分をこんな体にした神に、祈るしか。

蘭とコナンが帰った後、真昼の母――――朝乃が見舞いに来た。忙しい中、週に一度は必ず会いに来てくれる朝乃のことが、真昼は大好きだった。
「あら、真昼。今日もお友達来てたの？どう、楽しかった？」
「うん。今日は蘭さんとコナン君が来てたよ。でも最近風邪も流行ってるし、コナン君は春休みまで来れないかもって」
「そう…それで、今日はどんなお話を？」
「…今日はね――――」
朝乃は林檎の皮を剥きながら、娘の話を聞いた。余命宣告をされ、心の底で人生に諦めていた娘が見せた生への執着。それに、母として安心していたのだ。

「…ねえ、母さん」
「ん、なぁに、真昼」
　切り分けた林檎を真昼に差し出しながら、朝乃は返事をした。少し真剣な表情になった真昼に、気付いてはいない。
「私これから、折り紙を沢山折って、沢山作品を作る」
「…そうなの？どうして？」
　林檎に刺さった爪楊枝を弄りながら、真昼は答える。朝乃の顔を見ることは、できなかった。
「…蘭さん達へのプレゼント」
「あら！いいじゃないの。真昼は器用だから、きっと喜んでもらえるわ」
「そうかな？…それでね、この棚に、作ったのを入れておくから。もし蘭さん達が来てくれたら…伝えて欲しいなって」

　私が死んでしまったら。

　もう一度、林檎に爪楊枝を刺す。しゃくりと、小さな音が鳴った。
　一瞬の静寂の後、朝乃は手を止めた。口に入れようとした林檎を下げ、真昼の顔を見

る。
「…私がいうの？真昼から言った方が、喜ぶんじゃない？」
（そんなの、分かってるけど）
「私が、その…死んでからだから」

ぽとり。
何かが落ちた。いや、朝乃は理解している。林檎が落ちた音だ。自分で落としたのだから。思わず立ち上がっていた。なりふり構わず、娘の顔が驚きに染まっているのも。かまわず。
「…真昼？」
「母さん？」
真昼は困惑していた。朝乃も、困惑していた。というよりも、苦しさで胸がいっぱいだった。
（どうして、そんなことを言うの？）
「…真昼、貴女はまだ生きるのよ。あと、一年だけれど…ちゃんと生きるのっ！まだ一年あるの！なのに…しんだらなんて…そんな、こと…」

「母さん…？泣かないで、大丈夫だから、ほら、ね？」
あと、一年あるのだ。たった一年だけれど、まだ一年あるのだ。朝乃は覚悟している。娘の死を覚悟しているが、その娘から「死んだら」なんて言葉を聞いたから。
「母さん？私の余命は――――」
「そう、一年だけれど！生きるのよ、真昼！」
涙ながらに語る朝乃に押し切られた真昼は、ただ頷き、朝乃を慰めることしか出来なかった。それは、看護師が晩御飯を届けるまで続いたのだった。

真昼が、蘭達のプレゼントに折り紙を選んだ理由。
それは、折り紙があまり『必要』なものでなく、『壊れやすい』から。
折り紙なんてなくても生きていけるし、少し握りしめたら壊れてしまう。そんな、軽いものを真昼は渡したかった。
永遠に残るものは選択肢になかった。真昼は、彼女達の人生の一部にはなりたくない。優しい彼女達は、きっと捨てることは出来ないから。
時々思い出す程度で、いや、思い出さなくてもいい。壊れやすい折り紙が、壊れるま

でいいのだ。

真昼はもう少しで死ぬのだから。

――――　一年だけれど！生きるのよ、真昼！

「…そう。私はもう少しで死ぬ」

蘭からのメールを眺めながら呟いた。

『ごめんなさい真昼ちゃん汗

お父さんがインフルエンザになっちゃって

当分は行けそうにありません

学校でも流行るかもしれないから、

春休みになってからまたいくね！

その時は、私はほとんど三年生！素敵！

…真昼ちゃんがうちの高校にいたらもっと

素敵なんだけどね笑

それじゃぁ真昼ちゃん、またね』

少し、寂しい気もするが、自業自得だ。

スマホの電源を切り、ベットを倒す。真昼にとって、見慣れた真っ白な天井。シミなんて一つもなくて、それがさらに寂しさを引き立てた。

（…どうかまた、会えますように）

（それで、母さんの言う通り自分で渡せたら…それも、いいな）

「真昼ちゃん！久しぶりっ」

「蘭さん！…と、コナン君と哀ちゃん。お久しぶりです」

メールで言っていた時間から丁度五分前に、病室のドアが開いた。真昼一人の部屋が、少しだけさわがしくなる。

ちなみに、蘭達が来ていなかった間に二人姉妹が入院していたのだが、三日前に退院している。

「たったの二週間だけど、最近はほとんど毎日真昼ちゃんに会ってたからなんだか長く感じちゃった」

「…そうだね、私も。早く会いたいな、って、ずっと思ってた」

『たったの二週間』という言葉に、少し寂しくなる。蘭たちにとって、二週間とはたったで済まされる期間なのだ。でも、それが蘭たちの生きている証拠のようで、真昼は嬉しくもあった。

（…言わないと。私、もう死ぬかもしれないって。もう、来ない方がいいって）

指先が冷たくなる。やっぱり、言えない。指先を不自然にいじる真昼のことを、コナンと哀は不思議そうに見つめた。蘭は、お土産を袋から出すのでいっぱいそうだ。

「えーっと…よし！真昼ちゃん、これ」

「え？…と、…これは？」

丁寧にラッピングされた直方体を、蘭が真昼に差し出す。今までとは違うタイプの見舞い品に真昼が戸惑っていると、コナンが説明をしてくれた。

「これ、僕達から真昼お姉さんへのプレゼント！受け取って欲しいな」

「私に、みんなから？」
　今までの見舞い品は、食べ物が多かった。次に多いのは本だが、それはあくまで貸してもらっているだけ。つまり、消耗品以外のプレゼント、というものを、真昼はまだ貰ったことがないのだ。だからこそ、混乱していた。
「開けてみて」
「え、でも、悪いよ！私、いつもみんなにもらってばかりで…」
　何も出来ない、何も返せない。真昼は、いつだってその事を気にしていた。やはり申し訳なさが勝つ。
「お願いっ！子供達も、みんなで出し合って買ったものなの。みんな、真昼ちゃんに渡したいって」
　最初は私と園子で出すつもりだったんだけどね、と蘭が笑う。真昼は、どうすればいいのか分からなくなって、とりあえず開けてみることにした。
　蘭が揺れる小さな音と、梱包を破く音が病室に響く。
「…この本って！」
「そう。真昼ちゃんが好きって言ってた工藤優作さんの最新作！それにね」
　蘭が、開けてみて、と本を開くジェスチャーをした。工藤優作の本と言うだけで真昼は少し興奮していたのだが、開いてみて、さらに驚くことになる。

「嘘。これ…サイン？」
「正解！どうかな？」
俯いて本を見つめる真昼の顔を、蘭が覗く。お子様二人はその顔を見上げ、二人で微笑んでいた。
「嬉しい、嬉しいに決まってるっ。ありがとう、蘭さん！」
初めて聞く真昼の大きな声に驚き、心の底から嬉しそうな笑顔に、蘭も笑い返す。
「コナン君と哀ちゃんも、ありがとう。私、嬉しい。本当に…どうしよう、何て言ったらいいのか分かんない」
「真昼お姉さんが喜んでくれたなら僕も嬉しいな」
「…えぇ」
「本当に、本当に嬉しい。私の宝物だよ」
本を抱きしめ、真昼は呟く。そして、ハッとしたように棚から箱を取り出した。
「あの、これ。みんながくれたものには到底敵わないけど、私が作ったんだ。プレゼントのお礼と、進級祝いに」
箱を開けながら、三人に差し出す。中には、色とりどりの折り紙の作品が入っていた。そのどれもが、正しく完成品としてそこにあった。
「わぁ、凄い！これ、全部真昼ちゃんが作ったの？綺麗…」

「うん。私、ずっとここにいるから」
全部渡すつもりだが、その中でも一人一人に向けて作った作品を取り出す。
「これは蘭さんに。蘭の花なんだ」
「綺麗、すごい、すごいよ真昼ちゃん！いいの？」
「もちろん。もらってほしいな」
茎の部分までつけて、折り紙だと分かるが、その折り紙特有の可愛らしさがそれにはあった。そう、まるで蘭のように、凛々しく美しい花。
次に、サッカーボールとユニフォームの折り紙を取り出す。
「これは哀ちゃんに」
「あら。これ、比護選手のユニフォーム…」
「そう。私と哀ちゃんは比護選手応援団なんだもんね」
哀とグータッチをしながら、笑い合う。二人がここまで仲良くなったのは、共通の趣味――――比護隆佑選手のおかげなのだ。
真昼は哀から比護の話を聞いて、よく二人できゃっきゃっとしていた。もちろんその後ろには、呆れた顔のコナンがいたわけだが。
「それで、コナン君には…はい、どうぞ」
「リボンと、ランドセル…？」

「うん。コナン君といえば、これかなーって」
（俺ってこんなイメージなのかよ…）
リボンは分かるがランドセルって…と少々不満げなコナンだったが、それを真昼には見せない。さすが、見た目は子供頭脳は大人の名探偵である。
「そっか、コナン君今年で一年生だもんね。ランドセル、ぴったりじゃない？」
「そ、そうかもね。嬉しいなぁ、あははは」
なるほど！と思ったが、哀の方はサッカーボールとユニフォームである。今度からはサッカー好きをアピールしておこうと決めたコナンだった。

（…あれ？）
真昼が首を傾げる。
（コナン君、今年で二年生だよね？）
だって、ランドセルを背負ってここに来ることもあった。少年探偵団の五人で、仲良く。蘭の言い間違いかな、と思いながら、真昼は気にしないことにした。

「少年探偵団の皆にも、これ、渡してくれるかな？後、本ありがとう。嬉しいですって」
「うん。でも、真昼お姉さんから直接貰った方が、アイツらも喜ぶと思うよ？」
「っ…ううん。コナン君から渡して」
　コナンの言葉で思い出す。いや、無意識に考えないようにしていた事に気づいた、という方が正しいかもしれない。
（言わないと）
　何度目だろう。ずっとうじうじとしている自分に嫌気がさす。言おう、言おうと思って口を開こうとした時、ぽつりと、蘭がこう言った。
「私ももう高校二年生かぁ…」
「え？」

「え？」
「真昼ちゃん？どうかしたの？」
「いや、どうかした、というか…蘭さん？」
「はい」
　真昼の頭に、ハテナが沢山浮かぶ。得体の知れない気味の悪さが、背筋を撫でた。

「蘭さんって、春休みが開けたら高校三年生だよね？」
「えっ…違うよ～真昼ちゃん。私達同い年でしょ？ふふふ、どうしちゃったの」
蘭が笑う。コナンと哀も、微笑ましそうにしている。

（おかしい）

分からない、だって三年生になるってメールでも…はっとする。そうだ、メールを見せればいいんだ、と。真昼はいそいでスマホを取り出した。最近発売したばかりの最新機種である。
「ほら、蘭さんメール…で、も…？」
「私がメールで何を…って、なにこれ！」
突然動きを止めた真昼の手元を覗く。そこには、文字化けで理解不能な文が綴られていた。
「…何だかちょっとだけ、気味が悪いね」
「…うそ…っぁ」
「…真昼ちゃん？」

真昼の肩が上下に揺れる。呼吸音もおかしい。異変にいち早く気づいたコナンが、蘭に叫んだ。

「蘭姉ちゃんっ、ナースコール!!」

「っ、分かった」

哀は真昼の背中を摩り、コナンは発作止めの薬がないか探した。しかし、薬を見つけるよりも先に看護師がやって来た。

それと同時に、真昼の体から力が抜ける。

（私、死ぬのかな）

真昼は、夢をみているようだった。走馬灯かも、と、自分で理解していた。

十七年分の記憶が蘇る。

はずだった。

真昼は、気づいたのだ。その、記憶の量のおかしさに。

どうして私は、三年もこの病院にいるの、と。

真昼が入院したのは、余命一年宣告されてすぐ。それなのに、真昼はもう三つのカレンダーを使い切っていた。おかしい。

この世界っておかしいのかな。

暗いのか、明るいのか、何も分からないそこで真昼は笑う。何だか、おかしくなってきたのだ。

余命一年を悲観していた自分が笑える。

カレンダーを何個も替えていたのに気づかない自分が面白い。

どうしようもない自分が、馬鹿げていておかしい。

声を上げて笑ったが、そんなもの、この空間では分からない。

『ねえ、神様。それならどうして、私は今死ぬの？だって、一年経ってないよ』

真昼は呟く。

『どうして私は死んでないの？だって、三年も経ってる』

真昼は声を張る。

『神様、私、生きてはいけない存在だよね。でも、生きていたいの』

真昼は叫ぶ。

『だって私、まだ本読んでない』

真昼は声を枯らす。

暗くも明るくもないここに、何かが生まれた気がした。

それはまだ、動かない。

「…真昼？」

「…ぁ、さん」

何かに包まれた。何かが母親だと気づくのに、真昼は何秒もかけてしまった。喉が痛い。

「よかった…っ、本当にっ、よかった！」

「…おか、さん、いず…」

えずく母を抱きしめながら、水を要求する。しかし、上手く発音できていない。

「うん、うん。お水ね。はい…ぐすっ」

「…と」

水を勢いよく飲む真昼を見て安心したのか、朝乃は医師を呼ぶと伝え、立ち上がった。個室で一人になった真昼は、喉のチェックをしながらカレンダーを見る。

やっぱり、真昼が入院した年から時は進んでいない。
にやり、と弧を描き、起きたばかりでふらふらの身体を何とか起こす。そして、立ち上がり、よろけながら、まひるは窓を開けた。

冷たい風が真昼の頬を撫でるが、それさえ心地よい。
「…大丈夫、ちゃんと死ぬよ」
呟くわけでも、叫ぶわけでもなく、誰かに話しかけるように、真昼はそう言った。

まだ、音は聞こえない。

二話

それにしてもこの世界は、随分とおかしい。よくよく考えてみれば――――いや、実際は考えなくても分かるほど、矛盾と違和感で成り立っている世界だ。

検査を終え、朝乃からの食べて食べて攻撃も乗り越えた真昼は、真夜中のベットで一人考え耽っていた。何についてか――――それはもちろん、この世界のズレについてである。

数日前の騒動と発作により、真昼はこの世界の時間のズレを発見した。というよりも、ズレに気づいた。ひとつ気づいてしまえば面白いもので、つぎつぎと綻びが目に入る。

例えば、真昼の病気。

血を吐いたり、息が苦しくなる発作が起こったりするこの病気は、医者から難病だとは聞かされている。しかし、病名は知らない。幼いころから何年も寄り添ってきた最早真昼の一部といっても過言ではないこの病を、真昼は知らないのだ。

他にもある。

この世界――――特に米花町は、恐ろしく殺人事件数が多いのだ。毎日のように、誰が

死んだ誰が殺したとのニュースが流れ、もちろん視聴者はその度に恐怖する。怖い、気をつけようね、なんて言い合うが、ここまで頻繁に起こっても違和感を覚えないのだ。最早、怖い気をつけようの次元ではないのに。

…いつからこうなったのだろうか。

真昼の中で、疑問が反復する。少なくとも、真昼が十六になるまではちゃんと時が進んでいた。

真昼が十六になってから。誕生日を祝ってもらったことは何度もあるが、十七になったことはない。

この間に、何かが起きた。そして、時は空回り続ける。

まるで、音を立てずに進む時計のように。この世界はどこかがおかしい。

視界がぼやけていく。真昼は、病室に響く時計の音を聞きながら目を閉じた。

「蘭姉ちゃん、どこか行くの？」
スニーカーを履く蘭の背中に話しかける。顔を見なくても分かるほど、彼女の雰囲気は明るく、期待に満ちていた。
「うん。ちょっと友達のお見舞いにね。ほら、私の隣に入院してた真昼ちゃんなんだけど…覚えてる？」
「あぁ、あの…大人しそうなお姉さんだね」
思わず『薄幸』と言ってしまいそうになった口を何とか閉じ、コナンはその隣人の姿を思い浮かべた。
色素の薄い茶色の髪に、雪のように白い肌。そう言えば瞳の色も薄かった。髪よりも薄い茶色。顔は整っている方だったと思う。
なんというか、全体的に色素が薄く、風が吹けば消えてしまいそうな人だった。

とても危うい、儚い人だった。

蘭とは明らかにタイプの違う人間だが、何か接点でもあったのだろうか。

「それじゃぁいってきます」

「いってらっしゃぁい、気をつけてね」

扉が閉まったのを確認し、手を下ろす。気にはなるが、それよりも今から放送するホームズ特集のほうがコナンの中では重要だ。あの酔っ払いにリモコンを取られないためにも、コナンはすぐにテレビの元へ向かった。

そっと、病室の扉を開く。真昼以外入院していないその四人部屋は広く、普段三人で暮らしている蘭にとっては寂しく感じるものだった。

「真昼ちゃん」

「…あ、毛利さん。こんにちは」

パソコンに向かっていた真昼が顔を上げ、微笑む。どこか浮世離れした彼女の風貌

で、そんな風に儚げに微笑まれると、現実のものではないように感じてドキッとした。
「毛利さん?どうぞ、入ってください。風が気持ちいいですよ」
「っあぁ、ごめんね。ちょっとドキッとしちゃった」
何に、と首を傾げる真昼に対して首を振り、来客用の椅子に腰掛ける。
しばしの沈黙。
人懐っこくてコミュニケーション能力の高い蘭にしては珍しく、緊張していた。何を話せばいいんだっけ、と頭を回すが、心臓がどくどくと波打つばかりだ。
真昼もそうなのかな、と顔を上げてみると、緊張なんて関係ないという表情で窓の外を見つめていた。拍子抜けである。ぼーっとその横顔を眺めていると、急に振り返った。
「毛利さんも見てみますか?」
「えっ、あぁ、うん」
とりあえず頷き、窓際に手を付く。四階のこの部屋からは、綺麗な景色も街並みも見えない。ただ、一面に駐車場が広がっている。
蘭がまた、ぼーっと駐車場を見ていると、真昼が解説をしだした。
「あの子はきっと、予防注射に来た子です。あのおじいさんはおばあさんのお見舞いで…」

真昼が手を向けた方向には、確かにそう思われる人達がいた。蘭はなんだか楽しくなり、同じように手を伸ばす。
「あの男の人は風邪かな?辛そう…あのお上品なおば様は…んー、何だろう?」
「あの人はよく検査入院する人です。後ろにお子さんが…ほら」
「あ、本当だ!」
今見える人を解説――その実態は決めつけの自問自答に過ぎないが――し終え、新しい尋ね人を待つ。
そして、若い二人組の女性が現れた。
「あの人達はきっとお友達のお見舞いだね」
「ええ、そうですね」
お土産と思われる紙袋を持って、楽しそうに会話をしている。

微笑ましげな光景におもわず微笑むと、横から真昼の咳払いが聞こえてきた。
「…実を言うと、毛利さんが来るのもここから見ていました」
「えっ、そうなの?」
はい、と頷く真昼。その顔は真剣だ。つられて、蘭の顔も真面目な感じになる。

「あの、毛利さん」
「は、はい」
　きっと、これから真面目な話が始まる。蘭は身構え、きちんと真昼に向き合った。真昼は深呼吸をしている。
　そして、満を持して口を開いた。
「私、友人から見舞いに来てもらったの、今日が初めてなんです」
「え？」
「その、私…親しい友人がいないんです。だから今日、とても楽しみにしてて…その」
　もじもじと指を絡める真昼。蘭は急かさず、真昼の言葉を静かに待った。
「…今日はこんな話をしよう、とか、いろいろ考えていたんです。でも、いざ毛利さんを見たら…その…緊張、してしまって」
　真っ赤になった顔を両手で塞ぐ。まるで茹でダコのような真昼を見て、蘭は少し嬉しくなった。
（――なんだ。真昼ちゃんも、一緒だったのね）

というか、私よりも緊張してるじゃない、と、つい吹き出してしまう。蘭の心情を知らない真昼は、あわあわと手を動かし、突然項垂れた。
「やっぱり、その、嫌だったら――」
「ねえ、真昼ちゃん」
「え、あ、はい」
帰ってもいいですよ、と言い出しそうな真昼の言葉を遮り、蘭はにこにこしながら話しかけた。
「私のこと、蘭って名前で呼んでくれないかな?」
「えっ」
思わず顔を上げ、素っ頓狂な声を出す。想像していたものとは異なる蘭のニコニコとした表情に、この言葉が真実であることを真昼は確認した。じわじわと、嬉しさ、恥ずかしさが湧き出てくる。
「あのっ、でもっ」
「…だめ、かな?」
「うっ」
美少女の上目遣いに、呻く。ここで、蘭の顔の良さが牙を向いた。

「いいん、ですか？」
「もちろん！お願いしたいくらい」
　たどたどしく言葉を紡ぐ真昼が、愛おしく思える。入院していた時もそうだった。ちょっと恥ずかしがり屋で、でも芯のある彼女に惹かれた。だから蘭は、今ここにいる。
　今だけじゃなくて、また、ここに来たい。だから。
「…その、蘭さん」
「ふふ、なぁに、真昼ちゃん」
　二人で目を合わせ、笑い合う。まだ、心の壁は多い。親友とは呼べないけど、知り合いという程遠くもない。
　でも、それでいい。
「…蘭って名前、素敵ですね」
「ありがとう。私も真昼って名前素敵だと思うわ」
「ありがとうございます」

　こうして笑い合える。

「ねえ、今度は私の友達を連れてきてもいいかな？」

次会う約束ができる。

「い、いいんですか？」

また、会える。

「うん！きっと園子…友達も喜ぶと思うから」

そう信じていたから。

だから。

蘭は、別れなんて一ミリも想像していなかった。

「…怒ってる？蘭さん」
「…怒ってるかも」
「そっか」
個室が静かになる。蘭の表情は見るからに暗く、どうしたものかと真昼は頭を悩ませていた。
そもそも、全てにおいて真昼が悪い。
だからこそ、どうしたらいいのか分からないのだ。謝って済むようなことでも、はいおしまいで締められるようなことでもない。
ただでさえ静かな個室が、更に静かになっていく。
…先に折れたのは、蘭の方だった。
「私、怖かった。真昼ちゃんが倒れた時、本当に怖かったのよ」
「蘭さん…」

声が震え、視界が歪むのも気にせずに言葉を紡ぐ。
「もう会えなかったらどうしよう、お話できなかったらどうしようって」
「…わ、たしも…」
握りしめられた蘭の手を真昼が包み込む。真昼の手は、真っ白だけどちゃんと暖かい。真昼がまだ生きている証拠だ。
「私も、怖かった…蘭さん、たちと…まだ、一緒にいたかった、でも、でもっ」
包まれた手を、蘭も握り返す。二人して、顔はぐちゃくちゃだ。

「それ以上にっ、嫌われたくっ、なか、たの」

鼻の奥がつーんと痛くなる。握られた手が暖かくて、暖かくて、どうしても涙が止まらない。嗚咽が止まらない。
「ばかぁ！私たちが真昼ちゃんのこと嫌いになるなんてないよっ！」
「だって、私、こんなに大切な友達ができたの初めてだったの！」
「大好きなのよ、真昼ちゃんのこと！こんな顔になっちゃうくらい！」
「私だって、好きだよ…みんなのこと…」

蘭と真昼は、そのまま二人が冷静になるまでずっと泣きながら言い合っていた。
病室の前を通りかかった看護師が、思わず微笑んでしまうような言い合いを。

鼻をすする音が大きく感じる。目と鼻を真っ赤にさせ、抱き合いながらぐずっている女子高生二人というのは中々奇妙な絵面だろう。
「…蘭さん」
「なぁに」
「私、寿命があと一年しかないの」
「うん、お母さんから聞いたよ」
「蘭さん達に嫌われるのが怖かった」
「それもさっき聞いた。そんなのありえないのに」
「…蘭さん」
「なぁに、真昼ちゃん」
「ありがとう」
「ふふ、何それ」
ずっと言えなかったことを伝えられた。ありのままを晒せた。

時間はまだ、進まない。

けれど、真昼は一歩進めたような気がした。

「真昼ちゃん、鼻真っ赤だよ」
「蘭さんだって。目、真っ赤っか」
抱き合っていた二人は離れ、互いの顔のひどさを笑い合っていた。色白な真昼は鼻の赤さが目立つし、目の大きい蘭は充血した目が目立つ。でも二人にとってこれは、仲直りの証だ。
「ふふっ、こんなに泣いたのいつぶりだろう?ちょっぴりスッキリしちゃった」
「私も。蘭さんの泣き顔が見れて役得かも」
「何それ」
ジト目で真昼のほっぺをつつく。その柔らかさに感動しつつも、本当に真昼が元気になったのだと実感し安心する。

「あ、そうだ」
「ふぁい？どうしたの？」
　ほっぺをつつく手を止め、蘭がかばんを探る。そして、一枚の封筒を取り出した。色鉛筆で可愛く装飾されているそれは、明らかに子供達――少年探偵団からのものだった。
「これ、歩美ちゃん達から」
「…私に？そっか、皆にも心配かけちゃったもんね」
　今開けてみて、という蘭から封筒を受け取る。猫のシールを剥がすと、中には一枚の手紙と小さな紙切れが入っていた。
「えっと…これは」
　手紙には、早く元気になってほしい。真昼がいないと寂しい。元気になったらまた会いにいってもいいかな？というような事が、拙い文字で書かれていた。
　思わず頬が緩む。子供たちの本当の思いが、ひしひしと伝わってきた。
「他にも入ってたでしょ？」
「うん。えっと、なになに…少年探偵団が何でも言うこと聞きます券？」
「そうなの！」
　蘭が、その詳細について話す。どうやら、早く元気になってほしい！元気になったら

今度は真昼お姉さんの力になりたい！という意を込めて作られたらしい。
「何それ、かわいい」
「ふふふ、無期限なんだって」
　無期限、という言葉に胸がチクリと傷んだが、それ以上に嬉しかった。真昼は、その何でも券を撫でながら微笑む。チケットの字は他と比べて少し大人びているから、きっと哀が書いたのだろう。クールな彼女まで協力してくれたのだと思うと、微笑みがニヤけに変わる。
「そうだ！この子たち、今度のお見舞いに連れてきてもいいかな…？早く会いたいって言ってたんだけど」
「あ…それは…」
　突然口篭り下を向く真昼に、蘭の表情が曇る。もしかしたら、踏み込んではいけない所だったのだろうか。
（体調がまだちゃんと良くなってないかもしれないのに、私ってば…）
　自分の迂闊さを恥じる。撤回の言葉を述べようとしたが、それよりも先に真昼が口を開いた。
「もう、お見舞いには来ないで」

「え…？」

下を向いたままの発言だった。蘭から、真昼の顔は見えない。思わず零れた一文字が、蘭の困惑を表していた。

どうして？

それって。

どうしよう

「真昼、ちゃん？」

恐る恐る、真昼の名を呼ぶ。それに応えるように、真昼はゆっくりと顔をあげた。

「ごめんね、蘭さん」

真昼は、初めてのお見舞いの日と同じように。浮世離れした――儚い笑みを、ただ浮かべていた。

「すっげぇ!!!びっかびかだぜっ」
「すごーい！お店、前よりも増えてるー！」
「改装前から、二十店舗も増えたらしいですよー」
きゃいきゃいとはしゃぐ少年探偵団トリオ――――元太、歩美、光彦を乾いた笑みで眺めながら、コナンは遅れてくる同伴者を待っていた。哀は、飲食店をチラチラと見ている博士を睨みつけている。
（それにしても蘭達、おっせーなぁ。何やってんだよ）
やっぱり女はいろいろ大変なんだな、と思いつつ、どこか様子のおかしかった蘭を頭に浮かべる。コナンの鋭い勘が、蘭は何かを隠していると言っていた。
「なぁ、灰原。蘭のやつ、何隠してると思う？」
「…何、工藤君。私は別に、そんな風には見えなかったけど。よく見てるのね、彼女のこと」
「ばっ、バーロォー！ちげぇよっ」

ふーんと、興味無さげに哀が呟く。随分とムカつく態度だ。

「みんなー、待たせてごめんね！」

やっと、同伴者こと、蘭、園子がやってきた。その服装におかしな所はみられない。

「全然構いません！観てるだけで楽しかったです！」

「歩美後でこのお店いきたいなっ」

「俺はうな重の店いきてぇ！」

蘭と園子を三人が囲む。普段ならガキンチョ！と声を荒らげそうな園子だが、ニマニマしただけでその様子はない。

「はいはい、いいわよ。でもうな重の前に、お腹空いたでしょ？ご飯食べに行くわよ！」

…やけに機嫌がいい園子に、哀も眉を顰める。隣の蘭はいつも通りに見えるが、なるほど、いつもより足取りが軽い気がしなくもない。

「…な？なんか企んでるだろあれ」

「…そうね」

二人で子供らしくない表情を浮かべる。正真正銘の大人、阿笠博士は、ご飯の三文字に子供らしい表情を浮かべていたが。

屋上へ上がると、少し高級感のある飲食店が並んでいた。その中の一つ、和食の食品サンプルが輝くお店に、一行は向かう。
「着いた！今日はここでご飯をいただこうと思って」
「プレオープンだから人も少ないし、私のお陰で割引もきく！感謝しなさいね？」
お店は普通の所だ。変わった様子は見られない。子供たちも、素直に喜んでいる。勿論、一番喜んでいるのは博士なわけだが。
「なぁ！ここうな重あるのかな？」
「んー、まぁあるんじゃないの？和食だし」
元太はうな重があると聞いて満足気だ。
二人のことも忘れ、食品サンプルを見ながらメニューを考えていると、コソコソと話す蘭と園子がコナンの視界に入った。哀と目を合わせ、頷く。
「ねーねー蘭姉ちゃん、園子姉ちゃん。何かいいことあったの？二人とも嬉しそうだね！」
お得意の児童モードで、二人に話しかける。哀は乾いた目でそれを見ていた。
（こいつ…）

歪みそうになる顔も、培ってきたスキルで保つ。この上目遣いが重要なのだ。
「げっ…勘のいいガキンチョめ…まあいいわ！」
「ふふふ、コナン君も哀ちゃんも、きっとすごく喜んでくれると思うよ」
やっぱり何か隠していたか。しかし、悪いことでは無さそうだ。まあ素直に驚かされてあげようと、素直じゃないことを考えながら、コナンはメニューの選出に戻った。

「…え、な!?」
「あはは…こんにちは、みんな。久しぶりだね」

この後、素直じゃないコナンが思わず声を上げるほど、クールな哀がカバンを落とすほど、驚かされることになる。

蘭と園子は、こっそりハイタッチをした。

三話

久しぶりに見る病院以外の真っ白な天井。こちらもシミなんて存在しないが、真昼は息が乱れるほど興奮していた。なんてったって、真昼がデパートに来るのは小学生以来、時間にして四年、正確に言うと七年ぶりである。それが改装して間もないものなのだから、真昼以外の人間でもワクワクが止まらないだろう。

「わ、わ！すごい、すごいね蘭さん園子さん！やっぱりおっきいんだねぇ！」

「こら、あんまりはしゃがないの。序盤で体力使ってちゃ後半もたないでしょ？」

園子が肩を抑えながら落ち着かせる。真昼の息は少々静かになったが、目のキラメキは止まらない。蘭は真昼ちゃんらしいな、と静かに微笑んでいた。

「…で、本当に体調は大事なのよね？ガキンチョ達と一緒だと体力もいるわよ？」

園子が、声のトーンを落とし聞く。真昼も動きを止め、しっかりと園子の目を見て自分の今を話した。目のキラメキは健在である。

「うん。今日のために体力もつけたし、先生からも退院の許可もらったんだもん。大丈夫、絶対」

「…そ。それならいいわ！園子様のおかげでこのデパートは人も少ないんだし、存分に楽しみなさい！こんな経験二度もできないんだから」
「うんっ！ありがとう園子さん」
女子高生らしく真昼が園子に抱きつく。傍でずっと微笑んでいた蘭はハッとし、急いでそれに混ざった。女子高生仲良し三人組。真昼は経験したことのない青春を、しっかりと謳歌していた。

ひと通りイチャつきあった後、三人は足を進めながら例の計画について確認した。真昼は意気込み、園子は悪い笑みを浮かべ、蘭が足を弾ませる。
結果は、もちろん。

「うな重うめー!!」
「おいしいね」
元太の叫びに律儀に返事をする。いつもとは一味違う少年探偵団と御一行がそこに

はいた。新メンバーの登場である。真昼はうな重ではなくヘルシーな白身魚定食なのだが、まあそれはいいだろう。そう、問題はそこではないのだ。いわく付きの新入りにコナンは眉を顰めていた。

「真昼お姉さん、本当に大丈夫なの？」

「もちろん。じゃないと退院なんてさせてもらえないよ」

心配するコナンにニコリと微笑み、サラリと流す。このやり取りはもう何度目だろうか。少なくとも、元太が叫んだ回数には負けていないはずだ。あまりにしつこいコナンに園子が口を挟む。

「んもー、うるさいガキンチョね。真昼も大丈夫だって言ってるんだし、ちゃんとこっちでも用意はしてあるわよ」

「んぐ…それならいいんだけどさぁ」

用意はしてある、というのは初耳だが、とりあえず好意に甘えて触れないことにしておいた。今の真昼はとにかく、わくわくしているのだ。それはもちろん、七年ぶりのデパート、も理由の一つである。しかし、それ以上に心を躍らせるものがあった。

なんとこれは、真昼にとって初めての『友達と一緒の外出』なのである。

子供だけでの外出が許され始める中学校の間、真昼はクラスで孤立こそはしていないものの、思春期特有の内気さと持ち前の病弱さが重なり、親しい友人を作れずにいた。

休み時間は静かに本を読み、休日は一人ゴロゴロと過ごす。まあしかし、例え真昼に親しい友人がいたとしても、心配性の両親は友達とのショッピングを許してはくれなかっただろう。病院で多くの人とふれあい、人見知りから抜け出し始めていた真昼にとって、友達と何かを一緒に行うことは、叶うはずのない儚い夢であった。

それが今、叶っている。

発作とは違う、体が熱くなるようなドキドキを感じる。息苦しくなんてない、むしろ、心地がいい。食事を一緒にとるだけで、こんなにも心が弾む。これからもっと楽しくなるのだと考えると、自然と口角が上がった。

「…真昼ちゃん、楽しそうね」

「ええ。園子様のプランなんだから、当然でしょう?」

こそこそと話す二人。優しい目で真昼を見つめる二人も、顔にはしっかりと笑みを浮かべていた。

こんな三人を見てしまっては、コナンはもう何も言えない。隣に座る哀に肘で突かれ、これ以上真昼に問いかけることをやめた。そして、何かあった時は可能な限り支えようと、眼鏡に隠された眼を光らせた。

雑貨店でお揃いのストラップを買った。
ＵＦＯキャッチャーでぬいぐるみをとってもらった。
まだ穴もあけていないのにピアスを買った。
子供たちにお礼をしたらその倍のお菓子を貰った。
はじめて、プリクラを撮った。
宝物が増えていく。思い出が増えていく。
決意が少し、揺らいだ。

ベンチに座り、行儀が悪いと思いながらも真昼は足を伸ばした。病院暮らしで鈍った足は、数週間のリハビリではどうにもなってくれなかったらしい。博士と一緒にアイスクリーム屋の前で楽しそうにしている探偵団の子達を見ると、自分の体力の無さを実感する。
「真昼ちゃんは何味にする？」
「うーん…私はまだお腹も空いていないし、大丈夫かな。それに、あの子達を見ているだけでお腹いっぱいになっちゃいそうだから」
メニュー表を持ち隣に座った蘭に答える。あまりお腹が強くない、というのも理由だ

が、嘘はついていない。そっか、と笑い蘭は輪の中へ入っていった。周りにベンチは沢山あるが、真昼の他に座っている人はいない。プレオープンだという今日のデパートは、本来の状態を考えると本当に人が少なく、静かだ。夜は仕事を終えた大人の関係者が増えるため、こんなに静かなのは昼限定だと園子は話していたが。

…遠くから聞こえる笑い声や話し声が、寂しさを感じさせた。

いいや、遠くというにはおこがましいだろうか。ほんの数メートルなのだから。それでも、真昼にとっては遠く感じた。随分と、寂しがりで我儘になったものである。

…本当に、寂しがりで我儘だ。家を出た時と比べかなり増えた荷物に目をやる。遠慮してもグイグイと来る小さな紳士たちが持ってくれたので、真昼の負担にはなっていない。そんな彼らも今は無邪気な少年だ。とても無邪気で。何も知らない。

そうだ。

きっと、まだ何も知るべきじゃない。

だから、

「真昼お姉さん？」

「…コナン君？」

心配そうに、真昼の顔を覗き込むコナン。名前を呼ばれて初めて、自分が恐ろしいことを考えていたのだと気づいた。

「大丈夫？顔色、あんまり良くないよ。体調が悪いなら」

「大丈夫！ごめんねコナン君。本当に、ちょっと、疲れちゃっただけだから。全然、元気！」

小学生に心配される程わかりやすいのか、と凹みながらも、真昼は全然膨らまない力こぶをつくり精一杯元気さをアピールしてみた。実際、体は今までにないほど元気に溢れている。ただ少し、疲れてしまって。怖いことを考えてしまっただけ。

「本当？僕、もうあんな真昼お姉さんは見たくないな…だから、何かあったらすぐに言ってね！」

「うん。ありがとう」

実に子供らしくて、かわいらしい言葉。それでいて、大人びた気遣いをふんだんに感じる。ちぐはぐだけれど、心は温まる。江戸川コナン、という少年に真昼が抱いているモノを詰め込んだような発言だった。思わず、君は本当に子供なの？と聞いてしまいそうになる。しかし、真昼の開いた口からそれが紡がれることはなかった。

「あー！コナン君が真昼お姉さんとお話してる！何のお話ー？歩美もいーれーてっ」

「もちろん、歩美ちゃん。可愛いアイスだね」
　一番最初にアイスを手にした歩美が、真昼の側まで駆け寄ってきた。可愛いアイスだと褒められて、子供らしく笑う。奥に目をやれば、他の少年探偵団の子達もアイスを受け取り真昼の方へ向かっているようだった。
「あ、じゃあボクもアイスもらってくるね！」
「うん。転ばないようにね」
「見てみろよコナン！オレのアイスすっげーだろ！」
「うわ、何味だよそれ」
「全部混ぜ味だってよ！うめぇに決まってるよな！」
「元太君、声が大きいですよ！少ないとは言え他にお客さんもいるんですから」
　男の子達のやり取りを歩美と並びながら真昼は眺めていた。いつの間にか反対側には哀まで座っている。
「ふふ、面白い子達だね、本当に。哀ちゃんは何味にしたの？」
「コーヒーナッツ」
「大人だねぇ」
　真昼の発言に何か言いたそうな顔をしながらも、哀はそう、と一言だけ返し黙々とアイスを口にした。反対側の歩美も、小さな口でアイスにかぶりついていた。

「みんな食べ終わった?じゃあ次は…」
「あ!」
可愛らしい声に反応し、一同が歩美の指した先に目をやる。ひとつの小さな屋台が目に入った。
「あそこは…似顔絵、屋さん?」
「すごーい!とっても上手なんだね!歩美あの人知ってるよ、大統領さん!」
「わ…本当にたくさんのお店が出てるんだね」
いかにも画家、という帽子を被った青年が、よくみかける人物たちの似顔絵に囲まれて微笑んでいた。目を輝かせて彼を見つめる歩美を気にかけた真昼が、お願いしてもらおうか、と声をかけようとした時。タイミング悪く別のお客さんが席に座った。ピッシリとスーツを着こなした後ろ姿が印象的で、何故だか真昼は目をひかれた。
「ほら、次の予定は迫ってるのよ!エスカレーターでいざ二階へ!行くわよ!」
「…あぁ、はーい!今行きます、園子さん」
横にいたはずの歩美はとっくに興味をなくし哀とともに真昼を待っている。さっと踵を返し、そんな彼女達の後を追った。

脳裏では、あのスーツを着た男性の後ろ姿が点滅していた。

それは。一階へと下るエスカレーターに足をかけた、ちょうどその時のことだった。

「ひっ…い、イヤァァァァァァァァ!!!!!!!!」

けたたましい叫び声が、ぼんやりと余韻に浸る真昼の脳をつらぬいた。そして、真昼のすぐ横を何かが通り過ぎる。一階のステージでショーでも始まったのかと、おもむろに顔をあげた。

下降とともに近づく地面の、その先で。

へたり込む人と、倒れている人。
パイプ椅子に隠される前に確かに見えた、真っ赤なそれは、明らかに――――

「っ――――前を見ないでっ、目を閉じて！」
真昼の後ろに並んでいた少年少女たちに見せていい光景ではない。どうにか悲鳴を噛み殺し、声をあげ、真後ろの哀を抱きしめた。誰か一人だけでも、ほんの数秒でも、この光景から遠ざけたい。
「…みんな、後ろを向いて。ごめんね、大きな声を出したからびっくりしたよね」
子供たちは困惑しつつも、真昼の必死な様子に気圧され後ろを向いた。不安そうな顔で、最後尾の阿笠博士を見つめている。後ろを向き哀を抱きしめ顔を青くしている真昼には、前にいる友人二人を気遣う余裕などはなく、もちろん、博士の前にいるはずのコナンがおらず、先程横を過ぎていった何かが彼であるということにも気づいてはいない。
「…真昼ちゃん、そろそろ、一階につくから」
「っ…ありがとう、蘭さん。ごめんね、私…」
蘭の誘導に従いエスカレーターからおりると同時にようやく真昼から解放された哀

だったが、いつにも増して顔の青い真昼から離れることはできなかった。冷えているその手を引き、エスカレーター下のベンチまで連れていく。自分よりいくつも下の子に心配をかけていることを不甲斐なく思いつつも、うまく頭が回らない真昼はベンチに腰かけ、ぐったりと背もたれへもたれかかった。発作とは違う不快感が、真昼の胸を締め付ける。

あんなにも楽しかった一日が、全てあの光景に上書きされる。子供たちの人生に、今日という日が刻まれてしまう。どうすることもできない、やるせない。

死とはやはり、恐ろしいものだ。

だから――――

「真昼お姉さん、大丈夫？」

「ぁ…歩美、ちゃん。心配かけてごめんね。うん…もう、大丈夫。歩美ちゃんは、皆は大丈夫？怖いの、見なかった？」

俯く真昼に寄り添っていた歩美は、彼女が少しでも元気になるようにと、できるだけ

元気に、笑顔で答えた。
「ちょっとだけ見えちゃったけど、大丈夫！歩美たち、ぜーんぜん怖くなかったよ！ねー、光彦くん！」
「えぇ！ボク達は少年探偵団ですから！事件にはちょっとだけ、慣れてるんです！」
「あんなの、いつもみたいにすぐオレたちが犯人見つけてやるからさ！真昼ねーちゃんもよ、そんなに心配すんなよな！」
子どもらしい思いから出た一言だった。ただただ、目の前の真昼を元気づけたかった。

「慣れて、る…？いつも…みたい、に…？」

状況やこの後のことを聞いてきていた蘭と園子が、現場に張り付こうとしているコナンを無理やり引っ張って戻ってきたその時だった。
真昼の透き通った、よく通る声は、小さくとも何故か耳に入ってくる。だから、その声が震えていて、何かにショックをうけているのだろうということを、理解せざるを得なかった。
「みんなは、怖く、ないの？」

「えっ…？あ、うん！歩美たち、怖くない！だから真昼お姉さん、大丈夫だよ！歩美たちがいるから、大丈夫！」
「…真昼ちゃん？」
「そっ、かぁ…」
子供たちに顔を向けている真昼の姿は、蘭からは見えなかった。名前を呼んでも、聞こえていない様子で。ただ。
「…うん。ありがとう、みんな」
ただ、やはり。その声は、どこまでも、悲しそうな匂いがした。

少年探偵団からは、よく武勇伝を聞いていた。近所の猫を助けた話から、悪徳マフィアを打ち倒した話まで、たくさん。そのどれもを、必死に紡いでいく彼らがかわいくて、愛おしくて。真昼はその時間が好きだった。
目を輝かせて、自分の感情と友達のかっこいい所を述べる歩美ちゃん。
どこか遠慮しているようで、やっぱり誇らしげな光彦くん。

周りから指摘をいれられつつも、胸を張り大きな声で笑う元太くん。
すました顔で、でもとても楽しそうにしている哀ちゃん。
いつも話題の中心にいて、それなのに誤魔化したように笑うコナンくん。
この子達の輝く目が好きだった。真昼は、好きだったのだ。

汚いことから目を背けさせることが、彼らを守ることだろうか。凄惨な景色から遠ざけることが、彼らを守ることだろうか。分からなくなってしまう。

ただ、彼らが死を恐れず、死というものに慣れてしまっていることは。
それは、きっとあってはいけないことだ。
今の真昼が、今生きていることのように。

子供たちに、死を身近に味わわせてはいけない。それなら、今のままでいいのではないか。ちょっとだけ、そう思ってしまっていた。ただ自分が生きていたいだけなのに、子供たちのせいにしてしまおうとしていた。
死ぬべき人間が、生きる理由なんて持っていいわけないのに。
だから。

私は確かに死んでみせよう。
死ぬべき運命を、絶対に取り戻そう。
子供達が死に慣れてしまう世界なんて、あってはいけないのだから。

これが真昼の決意だ。
もう絶対に揺らいだりはしない。

「真昼ちゃん、大丈夫…？」
「あ、蘭さんに園子さん。ごめんね、心配かけて。みんなのおかげで、だいぶよくなったから」
こちらに気づいた真昼の顔色は、蘭が想像していたものより良く、さっき聞こえてきていた声が嘘であったかのように、声色もしっかりとしていた。少し不思議な気もするが、真昼が元気ならば、それが一番だ。
「よかった…今から放送があると思うけど、係員さんの指示に従って――――」

哀だけは、真昼から目をはなせずにいた。彼女の表情の変化を、この場にいる誰よりも理解できていたから。だからこそ、突然顔色をよくしたことが理解できなかった。

「灰原、ちょっと確かめたいことが…って、灰原?」

「…何?」

「いや、なんか険しそうな顔してるから」

「別に。人が一人亡くなってるんだもの。険しい顔くらいするわ」

「な、なんだよいきなり…」

真昼の気持ちを、この場にいる誰よりも分かっている。真昼が子供達にそうであってほしいと願うように、哀も、子供達に、そして真昼にそうあってほしいと願っているから。

それでも、哀にはどうしても真昼を理解することができないのだろう。

哀は生きることを決意した人間で。

真昼は死ぬことを決意した人間であるのだから。